

# 事業報告書

## 事業所名：法人本部

### 【平成 29 年度の事業状況について】

新体制が本格的にスタートした H29 は、組織作りとその安定が第一課題となりました。新経営陣の各々の役割分担を始め、職員との共有や情報交換の機会を今まで以上に増やし、新しい組織の基盤作りをしました。しかしこれについては、数年かけての取り組みが必要なため、H30 以降も丁寧に取り組んでいきたいと考えています。

それと並行し、人材育成にも力を入れて取り組みました。天野前理事長を講師に招いたゼミ方式の研修や、外部講師を招いた研修など様々なスタイルで学習の機会を多く作る事を心掛けました。また、人事考課導入以来行っている、目標管理面接も少しずつ定着し、職員間の振り返りやコミュニケーションの場として有効に活用され始めています。

雇用管理面については、コンサルタントを招いて非常勤職員の処遇の見直しを行ないました。3%のアップを目指し、話し合いを重ねながら、目標通りの改正となりました。これで、一昨年の常勤職員の見直しと併せて職員全体の処遇改善が一旦の着地をみたところです。

一方事業面ですが、就労系サービスについては、ピアス・オープナーが連携しながら、ピアス 13 名・オープナー 32 名の方々が就職され、概ね例年通りとなりました。しかし、活況に見える就労支援ですが、株式会社立の就労移行支援事業所の乱立、障害者専用の転職サイトの急増等で、就職はするものの離転職を繰り返す方が増え、職場定着に関する問題は山積みです。一方、生活系サービスでは、なびい・棕櫚亭 I とも今まで以上に多くの問題を抱える方のご利用が多く、より丁寧な支援が必要となってきました。加えてなびいでは、サービス利用計画書作成、地域移行支援へのニーズがより増えてきています。

さらに、地域貢献への取り組みですが、H28 から始まった「ラボ国スタ（国立公民館の学習支援）」、「おいしい時間（市内こども食堂）」への配食サービスが、定期的に行われ好評を得ています。また、それに伴う関係機関同士の職員交流も出てきました。その他、棕櫚亭 I の絵画のワークショップや、ピアスを使った高校生や大学生の体験実習の受け入れなど、「食」以外での地域貢献も始まり、地域との繋がりがさらに広がった一年間でした。

最後に棕櫚亭を取り巻く外部状況ですが、H30 は障害者総合支援法や、障害者雇用促進法が改正されました。それに伴い、報酬改定や雇用率の引き上げ（2%⇒2.2%）が行われ、今まで以上の激変が予想されます。そのため、棕櫚亭でもそれに合わせた事業の見直しや展開を行う予定ですが、これがただ報酬改定に合わせたものではなく、当事者ニーズに応えた質の高い支援につながる様にしていきたいと思っています。

### 【平成 30 年度事業計画】

H30 は新体制が 2 年目を迎えるため、引き続きこれへの取り組みが第一になると思います。

加えて事業面では、ピアスで「就労定着支援事業」が、なびいでは「自立生活援助事業」が新事業としてスタートします。また、オープナーでも、東京都より「精神障害者就労定着連携促進事業」を受託する事が決定しています。さらに、利用者される方の状況の変化に合わせ、ピアスでは、就労移行支援事業と自立訓練事業の定員変更を行うなど、法人全体の事業を大きく変化させていく一年となります。そのため、進捗を図りながら、事業展開を着実にすすめていきたいと思っています。

また、雇用管理面では、引き続きコンサルタントを招いて、導入から 3 年目となる人事考課（特にキャリアパス）の見直しを行う予定です。

その他、地域貢献については、「おいしい時間」、「ラボ・くにスタ」への配食の繋がりに由来してきた、「顔の見える関係」がベースにしながら、より地域に密着した取り組みが出来ればと考えています。

# 平成 29 年度 ピアス（就労移行・生活訓練）事業報告

## 基礎データ

（平成 30 年 3 月末現在）

	就労移行	自立訓練
登録者数	37 名	15 名
総利用者数	53 名	21 名
今年度の入所者数	22 名 生訓から移籍 3 名、リワーク利用 1 名	16 名 就労移行から移籍 5 名、リワーク利用 2 名、就活中利用 2 名、通常利用 7 名
見学者数	66 名	
職場実習者数	44 名(雇用前実習 4 件含む)	
疾病分類	統合失調症 12 名、発達障害 13 名、うつ病・双極性障害 8 名、気分変調症 1 名、社会不安障害 1 名、境界性パーソナリティ障害 2 名	統合失調症 3 名、発達障害 2 名、うつ病・双極性障害 5 名、気分変調症 1 名、社会不安障害 1 名、知的障害 1 名、強迫性障害 1 名

### ●29 年度の運営状況・利用実績等の振り返り

29 年度の目標である「トレーニング、プログラム、個別相談をより連動させていくこと」に関して、複数の職員が各トレーニング部門に入れるようになり、体制としては充実してきた。各々職員がその意識を持って取り組む一方で、各部門から共通の課題として部門内、部門間の現状共有の不足が出ていて、今後の取り組みとなっている。

就職者に関しては、27 年度の利用中断者が多かったことや、28 年度末に就職者が続いたことが影響し、29 年度上半期は少なかった（2 名）。下半期には就職者が続き、合計 13 名となった（内、自立訓練事業から 1 名。目標は 15 名）。利用率については、上半期は目標を下回っている。しかしその後入所者数が増え、また当年度は利用中断者が少なかったことから、下半期の利用率は上がった。新規入所に関しては、見学・体験利用は 28 年度と同じようなペースであり、オープナーのアセスメントケースも増えているが、入所に繋がるケースは少なかった。30 年度は、安定運営のためにも、コンスタントな就職者と利用率維持を目指す工夫が必要である。

食を通じた地域貢献のニーズはさらに増えている。高齢者配食だけでなく、地域の子どもの取り組みにも食事提供や準備手伝いという形で関わることが出来、喜ばれている。今後とも他事業所と連携をして取り組んでいきたい。他にも、直Bアセス・リワークの受入、大学やNHK学園と就労体験で連携、などに取り組んだ。

### ●就労支援の充実

利用者層の広がりへの傾向は依然あり、マッチングが良ければ早い就職が出来る方もいる一方、就職活動で苦労して時間がかかるケースも増えている。

オープナーとの連携強化を、昨年同様様々な場面で進めてきた。ダブル担当制がうまく機能し、早い段階で見通しを持ちながら計画的に支援を進めることも増えてきた。一方で、上記ケースが増えている状況と今年度の就職者人数は苦戦している点も併せて、来年度に向けては課題を検討する必要がある。

### ●自立訓練事業

29 年度の入所者数は、28 年度に立てた目標の 10 名入所よりも若干多い。利用目的別での利用者層は、就労移行に移る手前として利用する人が 11 名、リワーク・休職後の転職に利用する人が 5 名、就職以外の方向性に切り替えている人が 5 名、と就労移行移籍に向けての利用層が最も多い。一方で移籍に向けての動き自体はあるものの速度は遅く、今年度に就労移行へ移籍したのは 2 名に留まった。

就労移行へのスムーズな移籍促進に向けて、利用者自身がステップアップを実感しやすいように参加日数に応じてプログラムを段階的に設定したり、軽作業の種類を増やして利用者のモチベーションを上げたりすることで、就労移行へのスムーズな移籍を底上げする為の工夫を積み重ねている。

# 平成 29 年度 オープナー 事業報告

## 基本データ (H30.3.31 現在)

○新規相談者	142 名	→新規登録者	52 名
○総利用者数	284 名 (就業中 189 名)		
○就職者合計	34 名 (ピアス 12 名 (昨年度 17 名))		
○職場実習者	78 件 目標 (70 件) 達成		
○退職者	28 名		
(1 年未満離職 9 名 (内 6 ヶ月未満 5 名)・1~3 年未満離職 12 名・3 年以上 7 名 (内転職 2 他 5 名))			

### ●29 年度の運営状況・利用実績等の振り返り

昨年度の相談の状況から、「ネットワーク」を再構築する取り組みを行い新規相談数は増加した。増して今年度の利用者は、生活基盤や病状の不安定さが目立ち就職者数の達成に苦慮した。職業準備の経験のない方へのプラン作り、難しい定着支援、企業・地域へのアプローチと全職員が 1 人 2 役以上の働きをこなした一年だった。

### ●新規相談・就職・職場実習

新規相談者の傾向は、就職に対してリスクの高い方が益々増えている。例として複数の障害や診断、未治療ではないが通院していない、適切な教育を受けられなかったため読み書きが出来ない、公共交通が使えないなどがあり、就労より生活安定の必要性を理解してもらい医療機関や社会資源にアクセスする支援が多かった。

雇用率アップのあおりを受け、障害者雇用の取り組みを行う企業からの求人は増えたが、準備の整った障害者が激減し、就職者は年度終わりまで 30 名を超えるか見通しがつかない状況であった。内定を受けてからの定着支援や転職支援も積極的に行い達成した。

職場実習はピアスとの連携を重視し早めの取り組みを心がけた。その結果、利用者一人に対して 2~3 社実習することが現実的になったため実習数が増えた。就職の見極めや自信をつける体験となっている。

### ●定着支援・退職者

28 年度から数えて 1 年未満での離職者が 9 名となった。理由は病気の認識と障害受容の不足からくる病状悪化があげられる。準備不足のまま本人・支援者ともに急いだ就職は、早期の退職につながるため見直ししていく必要がある。

また 28 名の退職者のうち、就職が決まってからオープナーに登録した方が 6 名であった。信頼関係の構築を行いながらの定着支援を行う難しさを再認識した。

### ●オープナーとして地域への存在意義を明確にしていく

例年行っている支援機関向け研修では、近年の新規相談の傾向などから「発達障害と依存症」をテーマに取り上げたことや、当事者向けのセミナーでは当事者・企業担当者・支援者の意見交換とオープナー登録者 59 名のアンケートから継続要因について発信するなど、新たな取り組みにもチャレンジでき、盛況のうちに終えることができた。

職業準備不足が理由の離職者が多かったことの反省から、職員がハローワークや地域の就労支援機関・医療機関に出向き、安定して長く継続して働くために、今からできる職業準備性について、重点的に伝える「出前講座」を行なった。

# 平成29年度 なびい 事業報告

## 基礎データ

支援対象者数 250名			内支援稼働中		H27	H28	H29
					194名	183名	201名
内 訳	男性	133名	障 害 種 別	統合失調症	46%	発達障害	6.8%
	女性	117名		うつ・双極	15.2%	高次脳	2.4%
	平均年齢	46歳		神経症圏	4.4%	その他	4.8%
				知的障害	6.8%	不明	13.6%

### ●相談支援事業・計画相談・個別給付事業（地域移行・地域定着）

支援対象者の総数は250名、継続した支援を行なっている支援稼働中は201名と歴代のなびい記録を更新している。増加の内訳としては新規相談<表A>とサービス等利用計画作成<表B>・個別給付（地域移行・地域定着）<表C>の増加がある。特に計画作成は、予想200件/年間を大きく超えて245件となっている。さらに個別支援件数<表D>も増加傾向にあり、特に同行・訪問・関係機関調整の伸びが大きく、1件の支援にかかるボリュームが大きくなっている。

またトピックとしては、40代後半メンバーの精神科的な体調悪化による入院が目立った。いわゆる通所系サービスにつながっていない方々だったことも特徴的で、相談だけでなく「場」につながることで再発防止という原点に改めて取り組む必要性を感じている。

<表>	H27	H28	H29
<A> 新規相談	40件	40件	55件
<B> 計画作成	157件	174件	245件
<C> 地域移行	0件	1件	3件
地域定着	0件	0件	1件
<D> 個別支援数	7028件	8084件	9114件

### ●地域活動支援センター事業

今年度はプログラムに大きな変更なく、前年度と同様の形で実施してきた。次へのステップと位置づけて実施しているプログラム（パソコン倶楽部・和食の会・デイサービス等）は『まずはなびいプログラムで定着→次のステップにつながって卒業』という流れが定着してきている。ウォーキングについては、前年度後半に実施曜日を変更した為、それまで安定参加していた方が卒業した影響や、新しく参加したメンバーがそれぞれ体調の不安定さを抱えている方が多かったことから、特に前期は参加者数が少なかった。参加頻度の希望や出欠確認の方法をあらためて確認して、後期は少しずつ安定してきた。

### ●地域貢献など

当事者を支える家族に元気になってもらいたいという思いで例年開催している家族講座を、今年度も2回開催した。1回目は「障害のある方のお金について考える～経済的な自立に向けた具体的な生活設計の要点と公的支援～」、2回目は「笑いヨガ」というテーマで開催し、好評頂けた。

新たな動きとして、子ども食堂で関わっている神の国寮（児童擁護施設）となびいも出会う機会をもつことができた。そこからなびいのヨガ教室や家族講座で協働する機会を作ることができ、良い関係を築けて来ているので、これからも協働する機会を作っていきたい。

前年度から引き続き国立市自立支援協議会しごと部会では事務局として調整役を引き続き担っており、部会として具体的なしごと体験の機会の提供に取り組んだ。

その他に、地域連携・情報収集の場として、国立市自立支援協議会全体会、グループホーム運営委員会、TTN（多摩立川保健所圏域の支援センター連絡会）、医療連携連絡協議会などに積極的に参画・発信を行なった。

# 平成 29 年度 棕櫚亭 I 事業報告

## 基本データ

登録者数：39 名（国立市内 34 名/市外 5 名・・調布・府中・立川・国分寺で各 1 名）

男女比：男性 19 名/女性 20 名

入所者：3 名（30 代男性 2 名 / 20 代女性 1 名）

退所者：2 名（40 代男性 1 / 40 代女性 1・・いずれも他施設移行）

登録者平均年齢：44.6 歳

他施設併用者：なびい登録 31 名 権利擁護 2 名 ヘルパー 6 名 訪問看護 7 名 配食サービス 4 名

## ●29 年度の運営状況・利用実績等の振り返り

今年度は安定通所の利用者の力量が上がり、スタッフのサポートはありつつも利用者主体の行事が昨年度より増加した。加えてステップアップして他施設へ移行した利用者が 3 名、移行予定が 1 名、ステップアップを目指して力量が上がってきた利用者が 1 名と着実に力をつけて次へのステップに進んでいるメンバーもいる。

一方で安定通所利用者は“20 代・30 代数人”と“60 代”以降が多く、中間層の 40・50 代利用者は不安定通所が多い。また第 I を利用希望の見学者が“従来の作業参加は難しい”と思われる層が多いことや今後の第 I の利用者構成を考慮し、「作業内容・プログラム等」をより簡単な内容に変えていく必要性が出てきた。それにより後期からは、今後の利用者層を考慮した“新たな作業内容”の試みをスタートさせ概ね上手くいっている。

このことから、次のステップを目指す利用者、定期的に I に通うことで地域でより豊かな生活の維持を目標とする利用者の、2 つの層にはっきり分かれていくと感じている。今後は同じ屋根の下で活動しながら、より障害や個人の状況に沿った支援が求められている。

## ●ユニット・プログラムの実績

各プログラムの活動を振り返ると、スポーツプログラムは試合ではなく「リハビリとしてスポーツをする」ことを意識して話し合いを重ねたことにより、スポーツを楽しみにしてくれる新たな利用者が加わった。ウォーキングも利用者層に合わせて「短距離と長距離の“2 コース”」を新たに設けたことで“参加しやすく希望に合った”ものとなった。

また絵画教室では、恒例の絵画展に加えて今年度新たに地域の行事である「くにたち PARADA」に絵画展示で初参加したこと、市民を対象にした絵画ワークショップで絵を描くだけでなく皆でアフリカ音楽と太鼓を楽しむことを追加するなど新たな試みにも挑戦した。加えて福祉会館内の“喫茶わかば”での絵画常設展示や毎年開催される「福祉のつどい」での絵画展示も好評である。

その他ピアス生活訓練の利用者と合同で月に 1 回開催した「Life プログラム」も 2 年目を迎えて様々な内容を扱い生活に役立つ情報を学ぶ機会となった。軽作業では利用者層に合わせて考慮した、メモ紙切りや使い捨てウェス切り等の簡単な作業を集めた「庶務ユニット」を新たにスタートさせ概ね順調である。今後はますます多様な利用者に合わせて支援が必要になり、利用者層に合わせて作業やプログラム等の試みを徐々に導入し改善していく予定である。